

コタカチルドレン

—大妻コタカ精神を継承し、大妻教育を実践した人々—

Kotaka Children

- People who inherited the Otsuma Kotaka spirit and practiced Otsuma education -

高垣 佐和子¹, 井上 小百合², 井上 俊也³
TAKAGAKI Sawako¹, INOUE Sayuri² and INOUE Toshiya³

¹大妻女子大学博物館大妻コタカ・大妻良馬研究所
²一般財団法人大妻コタカ記念会, ³大妻女子大学キャリア教育センター

キーワード：大妻コタカ, 大妻精神, 聞き取り調査

Key words : Kotaka Otsuma, Otsuma spirit, Interview

1. 研究目的

私学において建学の精神は重要である。特に大妻学院は学祖大妻コタカが創立以来 60 年以上校長・学長を務めてきた。しかし、子どものいなかった大妻コタカ没後は親族以外が校長・学長を務めている。

学祖大妻コタカが亡くなって 50 有余年となった。大妻コタカ亡き後、大妻コタカの精神を伝えることができるのは、大妻コタカの教えを受けた人々である。大妻コタカの教えを受けた人々は、学祖大妻コタカが設立の目的として挙げた「学校の特性」である建学の精神である大妻精神を、どのように受け継ぎ、具現したかを明らかにする必要がある。

本研究では、大妻コタカから教育を受けた人々を「コタカチルドレン」と定義し、コタカチルドレンの中で大妻コタカと同じ教育者、学校創設者となった 4 名について調査し、大妻精神をどのように継承し具現し展開したかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究実施内容

「聞き取り調査等の実施」

学校、裁縫教授所などを創設または経営をした以下 4 名のコタカチルドレンについて聞き取り調査を実施。

1. 外山ハツ氏

令和 3 年 10 月 27 日 (水) : 北海道函館市に於いて、学校法人函館大妻学園創設者・外山ハツ氏に

ついて、外山ハツ氏と関わりのあった方から聞き取り調査を実施。

2. 湯田とき氏

令和 3 年 4 月 19 日 (月) : 茨城県下妻市に於いて、湯田裁縫所創設者・湯田とき氏について、湯田とき氏親族から聞き取り調査を実施。

3. 杉山すか氏

令和 3 年 6 月 24 日 (木) : 栃木県真岡市に於いて、杉山裁縫教授所創設者・杉山すか氏について、杉山すか氏と縁戚者及び関わりのあった方から聞き取り調査を実施。

4. 長澤八重子氏

令和 3 年 7 月 21 日 (水) : 群馬県みどり市に於いておいて、桐丘学園の経営をした長澤八重子氏・長澤義雄氏について桐丘学園関係者から聞き取り調査を実施。

3. 調査結果

本課題を究明するために次の 2 章を設定した。

3-1 章 大妻コタカの教え

最初に大妻コタカの教えについて以下の 4 点について確認する。

3-1-1 大妻コタカが開設した家塾、各種学校、女学校で大妻コタカが担当した科目。

3-1-2 講習録など通信教育で大妻コタカが担当した教科。

3-1-3 婦人雑誌などに掲載された大妻コタカの執筆記事内容。

3-1-4 大妻学校の訓話要項・生徒心得・毎月の

実行要目

3-2 章 コタカチルドレンによる大妻コタカの教えの継承

大妻コタカに直接かかわり大妻コタカの教えを継承したコタカチルドレンについて、以下の4名がどのようなキャリアを積み、大妻精神をどのように継承したかの検証を試みる。

1. 外山ハツ氏
2. 湯田とき氏
3. 杉山すか氏
4. 長澤八重子氏

3-1 章 大妻コタカの教え

3-1-1 「授業担当科目」から

家塾時代：

明治41年9月～大正5年9月の家塾時代の¹大妻コタカが担当科目について『創立十周年記念 大妻学校の過去と現在』(大正15年10月大妻学校同窓会発行)に「裁縫・造花・縫細工・壘細工・儀式用折紙並水引結方」と示されている。

表1. 担当教員と担当科目
(明治41～大正5年)

担当科目	肩書	氏名
裁縫、造花、縫細工、壘細工、儀式用折紙並水引結方	所長	大妻コタカ
修身		甫守 謹吾
編物		清水 ルイ
袋物		横山 市太郎
袋物		滋野 きよ
摘細工		吉岡 房太郎
刺繍		浅井 常次郎
綿細工		矢吹 鎮徳
裁縫		奥平 カガエ
摘細工、造花		早川 かほる
摘細工		羽場 コト

各種学校認可時代：

大正5年9月14日東京府知事より認可を受け各種学校に発展すると大妻コタカの授業担当科目は「縫細工・造花・壘加工・水引・作法」に変更され、「裁縫」の担当からは外れている。

表2は大正6年4月末日調査記録である。出典『大妻学院八十年史』

表2. 担当教員・担当科目・毎週授業時数
(大正6年4月末日調査)

担当科目	毎週授業時数	氏名	卒業校
縫細工、造花、壘加工、水引、作法	31	大妻 コタカ	私立和洋裁縫女学校
修身、教育	4	甫守 謹吾	福岡県師範学校
家事	16	古田 せき	岐阜高女
英語	2	佐藤 登美	日本女子大学 英文科
摘細工	31	吉岡 房太郎	
裁縫	30	奥平 カガエ	共立女子職業学校
袋物	31	滋野 きよ	私立和洋裁縫女学校

私立大妻実科高等女学校併設時：

大正8年4月文部大臣認可により私立大妻実科高等女学校が併設され、学校が成長する中で大妻コタカの担当科目は、表3で示す様に「裁縫・手芸」ではなく、「修身」「作法」に変わっている。

表3. 大妻コタカ担当科目一覧
(明治41～大正15年)

時代	担当科目	肩書	氏名	出典
明治41年9月～大正5年9月	裁縫、造花、縫細工、壘細工、儀式用折紙並水引結方	所長	大妻コタカ	大妻学校の過去と現在
大正6年4月末日調査	縫細工、造花、壘加工、水引、作法			
高等女学校大正8年～	修身		大妻コタカ	大妻学校の過去と現在
大正10年度	修身、作法	校長	大妻 コタカ	白ゆり1号
大正11年度	修身	校長	大妻コタカ	白ゆり2号
大正13年度	修身	校長	大妻コタカ	白ゆり3号
大正14年度	修身		大妻 コタカ	白ゆり4号
大正15年度	修身		大妻 コタカ	白ゆり5号

3-1-2-1 『大妻技芸講習録』から

通信教育の教本である『大妻技芸講習録』(昭和3年9月1日大妻講義録出版部発行)からは、大妻コタカが「修身科」を担当したことを確認することが出来る。

この『大妻技芸講習録』の特色について、講習録に次のように記されている。

「淑徳を涵養することは女子教育の最大目的でなければなりません。それ故にあらゆる学芸の講術に当たって、苟も訓練陶冶の問題に触れるときは、各其の学科を通じ、特に実践道徳に力を注ぎます。而して貞淑温雅にして、然も着実なる賢婦人を養成することが本講義録の生命であります」とあり、大妻学校・大妻コタカが人間形成のための「道徳」を重視していることが分かる。

『大妻技芸講習録』の1～8号まで大妻コタカが

担当した修身科の講義内容は次の通りである。
 第一号 1 恩義を知れ 2 少女の徳 3 修学
 第二号 4 質素 5 節制 6 健康 7 言語
 第三号 8 礼儀 9 改過 10 朋友 11 正直
 第四号 12 親切 13 孝道 14-1 教育の関する勅語 14-2 教育の関する勅語 (其の二)
 第五号 1 婦人の修養 2 読書と修養 3 家
 4 祖先 5 父母
 第六号 6 親族 7 皇位及び皇室 8 国民
 第七号 9 公務 10 国民性 11 国民の覚悟
 第八号 13 反省 14 能率高き生活 15 女子と修養

この『大妻技芸講義録』の科目には裁縫・手芸の科目が設けられていたが、大妻コタカは裁縫・手芸を担当せずに修身科を担当していたことに注視したい。

3-1-2-2 『家庭女学講習会』から

『家庭女学講習会』と題する通信教育の教本では、大妻コタカは「婦人道德講話」を担当している。

この「婦人道德講話」の講義内容は次の通りである。

- 序講：お話の聞き方
- 第一講：強く正しくにこやかに
- 第二講：上見て学べ下見て暮らせ
- 第三講：努力の前に不能なし
- 第四講：論で負けても行で勝て
- 第五講：長所と交われば悪友なし
- 第六講：話し上手に聞き上手
- 第七講：己に克って人には譲れ
- 第八講：焦るな休むな怠るな
- 第九講：向上の一路に終点なし
- 第十講：仲よく働け笑って暮らせ
- 第終講：妻及母としての道

3-1-3 婦人雑誌等掲載の大妻コタカ執筆記事内容から

大正から昭和にかけてマスメディアの一つとして雑誌の需要は高く、婦人向けの雑誌も多数刊行された。

女子教育の発展と共に大妻学校は急速に発展し、大妻コタカも名士のひとりとして世の中に認められ多数の雑誌から執筆依頼があり、当時のいろいろなジャンルの著名人との座談会にも参加をしている。

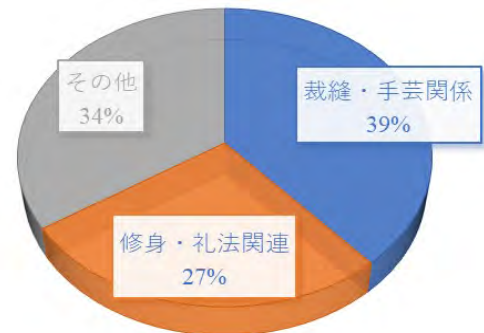
ここでは大妻コタカが執筆した雑誌の中から『主婦の友』主婦の友社・『婦人倶楽部』大日本雄弁会（現講談社）・『婦女界』（婦女界社）・『少女倶楽部』日本雄弁会（現講談社）・『家の光』産業組合中央会の5雑誌を選び、その記載内容を「裁縫・手芸関係」「修身・礼法関連」「その他」に分類し検討を試みた。

次の表4は「婦人雑誌掲載内容分類一覧」である。

表4. 婦人雑誌掲載内容分類一覧

雑誌名	出版社	調査対象の発行年	裁縫・手芸関係	修身・礼法関連	その他	掲載件数合計
主婦の友	主婦の友社	大正7年～昭和28年	28	6	8	42
婦人倶楽部	大日本雄弁会（講談社）	大正10年～昭和20年	57	49	72	178
婦女界	婦女界社	大正11～昭和15年	18	11	23	52
少女倶楽部	大日本雄弁会（講談社）	大正12年～昭和19年	1	10	7	18
家の光	産業組合中央会	大正15年～昭和20年	21	12	1	34

次のグラフ1は、上記の表4で分類した「裁縫・手芸関係」「修身・礼法関連」「その他」を円グラフに示したものである。



グラフ1. 婦人雑誌掲載内容分類一覧

上記グラフ1から裁縫学校の校長である大妻コタカが婦人雑誌等で執筆した内容は、「裁縫・手芸」に留まらず「修身・礼法関連」も多数あり、修身や礼儀作法が世の中に求められていたことを示している。

3-1-4 大妻学校の訓話要項・毎月の実行要目

<訓話要項>

大妻コタカの創設した大妻学校では、教育方針として知識技能と共に徳性の涵養が教育方針とされ、大正14年3月に「訓話要項」が制定（大正

15年9月修正)された。

訓話要項は大妻学校の教員が所持する教育手帖(教師が生徒の成績や出欠を記録する手帳)に掲載され、当時の教員は毎教授時間必ずその学科を通じて実践できる徳目を敷衍(ふえん)指導することが義務付けられていた。

また各教員には毎教授時間前において予め生徒に伝授する徳目とその敷衍指導の方法を研究準備することを要請されていた。

さらに各教員に其の学科を通じて敷衍指導すべき適当なる徳目が示され、適当なる話題を選定して毎教授時間中適当に指導することも求められていたのである。

敷衍指導すべき適当なる徳目「訓話項目」のタイトルだけを示すと以下のとおりである。

1. 修養 2. 自立 3. 自覚 4. 自尊 5. 自重
6. 虚心 7. 慎独 8. 公明正大 9. 正義 10. 至誠
11. 廉恥 12. 名誉 13. 貞淑 14. 温雅
15. 謙遜 16. 寡言 17. 重厚 18. 恭儉
19. 沈著 20. 機敏 21. 鍛錬 22. 快活 23. 淡泊
24. 正直 25. 真実 26. 去華就実 27. 反省
28. 改過遷善 29. 荒怠 30. 軽佻浮薄 31. 卑屈
32. 虚栄 33. 粗暴 34. 自律 35. 勇氣
36. 抑制 37. 克己 38. 忍耐 39. 勇健
40. 自彊(じきょう) 41. 理想 42. 品性
43. 安心立命 44. 趣味 45. 信仰 46. 徳器成就
47. 修学 48. 立志 49. 知能啓発 50. 動作端正
51. 服装整齋 52. 習業 53. 衛生
54. 清潔 55. 整頓 56. 能率増進 57. 節約
58. 貯蓄 59. 注意 60. 綿密 61. 適度
62. 中庸 63. 節制 64. 用心 65. 勤勉 66. 浪費
67. 油断 68. 父母の恩 69. 孝行 70. 敬愛
71. 従順 72. 友愛 73. 親和 74. 夫婦和合
75. 子女愛育 76. 崇祖 77. 家名発揚 78. 僕婢憐愍
79. 家庭整理 80. 神仏崇拜 81. 宗家奉仕
82. 家風尊重 83. 親族奉仕 84. 生活改善
85. 恩義 86. 対人の恩義 87. 謝恩
88. 報恩 89. 社会の恩 90. 自他の別 91. 秩序
92. 社会連帯 93. 共存共栄 94. 和衷協同
95. 本分各守 96. 醇厚中正 97. 責任感得
98. 義務励行 99. 虚言 100. 中傷 101. 高慢
102. 邪推 103. 嫉妬 104. 猜忌 105. 虚偽
106. 違約 107. 責任回避 108. 礼節 109. 静肅
110. 良風美俗 111. 公衆衛生 112. 左側通行
113. 信義 114. 職業 115. 世務 116. 甘言
117. 情実 118. 奉公 119. 服務 120. 公

私の別 121. 公務 122. 社会奉仕 123. 寛恕
124. 親切 125. 同情 126. 慈善 127. 公益
128. 公德 129. 社交 130. 接客 131. 寛容
132. 柔和 133. 雅量 134. 規律 135. 誘惑
136. 師恩 137. 校規尊重 138. 校風発揚
139. 制服励行 140. 時間励行 141. 動物愛護
142. 植物愛護 143. 国恩 144. 国体の意義
145. 国体擁護 146. 日本の国体 147. 感激
148. 我が皇室 149. 尊重 150. 皇恩 151. 忠君即愛国
152. 皇室中心 153. 犠牲 154. 挙国一致
155. 遵法 156. 博愛 157. 国際仁義
158. 国際礼儀 159. 民族の安栄 160. 社会の福祉
161. 採長補短 162. 国際連盟 163. 文化生活

<生徒心得>

大妻コタカの創設した大妻学校では、教育方針として知識技能と共に徳性の涵養も教育方針とし、大正14年3月に生徒向けに生徒心得が制定(大正15年9月修正)されていた。

生徒心得には「各自に携帯せしめ服膺(ふくよう)実践せしむ」と携帯して心にとどめて片時も忘れず実行しようと記されている。

生徒心得は、校訓「恥を知れ」の精神を体得して心身の修養に努めなければならぬとある。

そして「道德の三綱領」として、

1. 本校の生徒は須く従順であれ。

1. 本校の生徒は宜しく恩義を感謝せよ。

1. 本校の生徒は須く勤儉をとうとび職業に励めとある。

<毎月の実行要目>

大妻学校では校訓、綱領に副うため毎月特に実行する要目が定められその実行要目は校内に掲示、通信簿にも記載、生徒たちに周知する工夫がされていた。

昭和6年版毎月の実行要目は以下のとおり。

4月：左側を歩ませう。

5月：廊下階段等を走らないようにいたませう。

6月：時間を尊重し朝礼に遅れないように努めませう。

7月：言葉遣いを丁寧にし大声を慎みませう。

9月：学用品は正規のものを用いませう。所持品には階級と名をかきませう。

10月：お掃除は隅々まで綺麗にし教室内はいつ

も整頓いたしませう。

11月：紙屑や針を落とさないようにいたしませう。

12月：着物袴を折目正しく清潔にいたしませう。

1月：礼儀（お辞儀）を正しくしとやかにいたしませう。

2月：頭髪は心持よくきちんと手入れいたしませう。

3月：お座を立つ時は忘れ物のないように気を付けませう。

昭和14年以降は、次のように要目が変わっている。

4月：本校の生活によく馴れませう。

5月：何事も上品にいたしませう。

6月：清潔整頓に努めませう。

7月：規律を正しくいたしませう。

9月：進んで学習をいたしませう。

10月：体位の向上を図りませう。

11月：礼儀を重んじませう。

12月：喜んで働きませう。

1月：贅沢を戒め物資を愛護いたしませう。

2月：公德を重んじませう。

3月：総てに感謝いたしませう



写真1

写真1（一般財団法人大妻コタカ記念会所蔵。撮影者不明。撮影日不明）は、昭和18年講堂での集会の様子である。写真中央、講堂の壁に「何事も上品に致しませう」と掲げられている。

<3-1章 大妻コタカの教え・まとめ>

大妻コタカは裁縫学校開設当初は、専門的な技術指導や分かりやすい解説本を出版しテクニカルスキルを教育している。学校として認可を受けると、教育方針として知識技能と共に「徳性の涵養（じっくり道徳心を養うこと）」を掲げ、校長である大妻コタカは知識技能である裁縫手芸をほかの教員に任せて、自身は生徒たちに対して社会に生

きる人間としての自己制御の必要性を様々に説き導いてことがわかった。

私立大妻実科高等女学校が併設され学校が成長した大正8年4月からテクニカルスキルは他の教員が担当し、自らは他者との良好な人間関係を構築し、円滑なコミュニケーションを可能とするためのヒューマンスキルを教育したのである。

また、大妻コタカは修身・礼儀作法の一人者として世の中に求められ「礼儀作法」の本を各種出版している。

礼法指導の講師として他校へ招聘されていたのである。現茨城女子短期大学である『大成学園100年史』（平成22年・学校法人大成学園発行）に、昭和10年前後大妻コタカに礼法指導を頼んだことが以下のように記されている。

大成学園創設者の額賀キヨ氏は、創設以来「女先生」と尊敬を込めて呼ばれ、教育を通じて女子の地位を高めたいという大望を胸に秘めていた。学園創設時から教壇に立ち、裁縫や礼法を担当し、また良い先生を探して学校に招いていた。昭和10年前後には、大妻コタカを月1回ほど礼法指導のために招へいしていた、とある。

3-2章 大妻コタカに直接かかわり大妻コタカの教えを継承したコタカチルドレン

大妻コタカの教えを継承し学校・裁縫所などを創設または経営したコタカチルドレン4人について詳述する。

1 外山ハツ氏

コタカチルドレン：外山ハツ

大妻在学期間：大正6～12年

創設校：函館大妻学園（北海道函館市）

調査日：令和3年10月27日

聞き取り対象者：池田延己氏（学校法人函館大妻学園理事長）

大妻進学の本機：

外山ハツ氏の生い立ちについて、外山ハツ氏が創設した函館大妻学園の『創立90周年記念誌』（平成26年・学校法人函館大妻学園発行）に次のように記されている。

外山ハツ氏は明治26年北海道函館区に誕生し、生後間もなく里子に出され、小学校を卒業するまで4回も姓が変わり、そのたびに横浜・広島・神戸と住所も学校も点々とした。17歳で函館裁縫女学校へ入学、19歳のときに初めて里子になった経

緯を知ったという。実の母の顔を見ることはなく不遇な生い立ちである。

21歳の時に親戚の勧めで海産商を営む男性と結婚し2人の男子に恵まれるが、結婚生活には恵まれず生活を支えるために子供の頃から鍛錬を積んだ仕立物で生活を支えたという。

仕立物で賃金を得るだけではなく、函館に私塾を開き近所の子女に和裁と手芸を指導していたと『北海道私学教育史』（昭和63年・北海道私学協会発行）に記されている。私塾の開設は、大正2年3月のことである。

外山ハツ氏が大正2年に私塾を開いたころの日本は、女は裁縫・手芸さえできれば良いとされ、女には学問はいらないとされた時代であった。

『北海道私学教育史』に私塾で教えていた頃の外山ハツ氏的心情を次のように記している。

肉体も知恵も伸び盛りの娘たちを前に、彼女の心奥を揺さぶっていたのは、この娘たちがやがて成人して家庭を持ち、一家の支柱となって、その社会の重要な成員となったときに役立つ教養や知性をなんとかして与えたいということであった。

外山ハツ氏は男子に伍して広い見識と高い教養をもつ女性を育成し、平和にして明るい社会形成に役立つ子女教育を目指したいと考えていたことをうかがい知る記述である。

そして大正6年、2人の幼子を抱えて離婚するとこれを人生の転機と捉えて「女子教育」に従事すること志し、上京、大妻コタカと出会い大妻に入学をする。

外山ハツ氏が大妻に入学を決めた理由について『大妻学院八十年史』（平成元年・学校法人大妻学院発行）によると、

外山ハツ氏ははじめて函館から東京に出たとき、東京にはいろいろな学校があるから、その学校を一所一所回って自分の理想にあう学校、しかも教育よりも人柄を重視して学校選びをしたが、外山ハツ氏が大妻コタカの姿を一目見た時にこれは何校も回る必要はない。自分の師とたのむ方はこの先生であると決心したからである。

『大妻コタカ先生追悼録』（昭和45年・大妻学院発行）に、外山ハツ氏が大妻コタカに師事した理由が以下のように記されている。

私が「大妻の門をくぐったのは、大正6年のことでした。その時、校長であるお母様（大妻コタカ）に、はじめてお会いしたときのことを、私は、今でもありありと思い出します。お母様はもちろ

んと和服でした。帯の端をいろいろと継ぎ合わせて非常に質素な身なりをしていらっしゃいました。

しかし、お母様は、あたたかい笑みをたたえて私を迎えてくださいました。私はあの時ぐらい、ジーンと身体中に電気がかかったようで、真剣な尊い気持ちに打たれたことはありませんでした。その時、何のためらいもなく、私は自分の師と仰ぐには、この方をおいて他にはないと心に決めたのでございます。

雑誌『主婦の友』（昭和8年1月号・主婦の友社発行）に、大妻コタカが外山ハツ氏について記した記事があり、そこには以下のように記されている。

大正7年の2学期のこと、26歳になる外山ハツという婦人が私の学校の刺しゅう科に入学したいとやって来た。履歴書を見ると、多少年齢はいつているが、何か発奮の動機となったことでもあったのか、大分熱心に希望しているとのことで入学を許すことにした。聞けば既に2人の男の子があるとのこと、家庭的な詳しい内情はまだはっきりわからない。

入学後ハツの居る寄宿舎の一室にはいつも遅くまで電灯が付いて行ってみると、せっせと縫物をしている。後で同室の人に聞いてみると、四谷の呉服屋から注文をとって毎晩で一枚の着物を仕立てる仕事をしているとのことであった。

本人を呼んで聞いてみると、北海道にいる両親を無理に説き伏せてやっと上京した。志を立てて上京し勉強しているので、仕事をしっかり身につけ独立の自信が出来るまで途中でむざむざ帰りたくない。病気をしてお金のことで両親に迷惑をかけないように裁縫をして貯金をしているのだという。

夜更けまで仕事をし、翌日の学習に差し支えないかと聞けば、「私は決して人に負けぬように努めます。お許してください。」と答えたという。そしてその言葉どおり、外山ハツ氏は在学中人並優れた成績を示したという。

大妻学校で積み上げたキャリア：

外山ハツ氏は足かけ6年間各種の手芸を修得した。大正9年春からは刺しゅう速成科、刺しゅう高等科、刺しゅう研究科を終えて刺しゅう、編物、造花、水引、袋物、家事方面を極め、大正12年暮れに卒業する時には茶道、華道の師範免状をとり、生涯を貫く学校経営の大きな力、キャリアを養っ

た。

大妻コタカの教育の特徴は「個人教授」で、特異質の生徒にも向くよう常に大勢の先生がなるべく少人数の生徒を受け持つように努められていた。これは単に進度の遅い生徒の面倒を見るだけでなく、進度の速い生徒にはできる限り可能性を引き伸ばす指導が行われていた。外山ハツ氏はこの個人教授の方法により、入学前に得ていた極めて優れた技芸が更に引き伸ばされ修得した一人であったといえる。己にも気づかない能力が大妻教育により引き出されたのである。

同窓会誌『ふるさと 36号』（昭和58年・一般財団法人大妻コタカ記念会発行）に外山ハツ氏と同時期に大妻で学び教えた卒業生の中条しな氏が外山ハツ氏の思い出を記している。そこには、外山ハツ氏と特別な付き合いはなかったが、外山ハツ氏のことは寄宿生のみならず通学生の間でも、物



写真2

凄いな努力家で、大妻で学べるものは何でも自分のものにしようとの意気込みで努力をしていた姿を目撃し、彼女の作品には眼を見張ったものだと記している。

写真2（学校法人函館大妻学園所蔵。撮影者高垣。令和3年）は、学校法人函

館大妻学園内に展示されている外山ハツ氏在学中

の日本刺しゅうの作品「櫻下の孔雀」である。（さ完成までに600時間。金糸銀糸が反射し電灯の下では作業ができず、日中の限られた時間に作業したという。上野公園に通い孔雀のスケッチをしたが、なかなか羽を広げてくれず困ったそうである。

大妻教育の継承と具現：

<私立函館大妻技芸学校の創設>

大正13年外山ハツ氏は各種学校「私立函館大妻技芸学校」を創設した。創設にあたって師大妻コタカから全国唯一の姉妹



写真3

校として、特に「大妻」の名を冠すること許され、校訓「恥を知れ」をモットーに「良妻賢母」の育成を基調としてスタ

ートをした。

写真3の創設承諾書（学校法人函館大妻学園所蔵。撮影者高垣。令和3年）は、学校法人函館大妻学園内に展示されている。

<大妻技芸学校卒業生の奉職>

新しく創設される函館大妻技芸学校のために、大妻コタカは大妻技芸学校裁縫高等科卒業の神田マスコ氏を派遣した。郷里が山口県である神田マスコ氏はその生涯を外山ハツ氏と函館大妻学園に捧げ、郷里の山口県へはたった一度帰っただけであったという。

大妻技芸学校から卒業生が次々と函館大妻技芸学校へ奉職し、大妻教育が函館の地で継承された。次の表5（『創立90周年記念誌思いをつなぐ十年』28頁。学校法人函館大妻学園発行。平成26年）は大妻技芸学校卒業後函館大妻技芸学校に奉職した者の一覧である。

表5. 大妻技芸学校卒業後函館大妻技芸学校に奉職した者

氏名	卒業年月	卒業学科 他	備考 (出身地)
外山 ハツ	大正11年1月	手芸部刺繍高等科	函館市 函館大妻女子高等技芸学校
	昭和12年2月	手芸部刺繍研究科	
	昭和12年2月	手芸部造花速成科	
神田 スマコ	大正8年	裁縫部高等科	山口県美弥郡綾木村景平
内海 千代	大正11年3月	裁縫部速成科	北海道中川郡幕別村白人村四千本
錦織 八重	大正12年11月	裁縫部速成科	
菅原 節子	大正14年3月	裁縫部高等科	秋田県大久保町
佐藤 愛子	昭和3年3月	裁縫部高等科	秋田県鹿部郡増田町七日町
小嶺 麗	昭和10年3月	高等技藝科	東京市牛込区砂土原町
窪田 里江	昭和11年3月	高等技藝科	東京府下南多摩郡由井村小比企

<個人教授法>

外山ハツ氏は函館大妻技芸学校において、自らの体験に基づき大妻コタカ教育の特徴である個人の能力を十分に発揮できる「個人教授法」を採用し、大妻教育を継承した。

<何時からでも学べ>

大妻コタカが学びたいと思う者にとことん学びやすい環境を用意し、広く女性一般に実際的な技芸教育を解放することに務めたように外山ハツ氏もまたこの精神を継承し、家庭の事情やその他により就学できないながらも向学心に燃える有能な人々に教育の恩恵を浴させるため、入学者の年齢制限を設けなかった。また、夜学部も早くからも開講された。

<生徒作品バザー>

大妻コタカは大正4年4月に靖国神社の春季大祭を期して第一回の生徒成績品展覧会を開催し、1200名を超える一般入場者を集め、制作品の素晴らしさが評判を呼び、大妻技芸伝習所の存在が世間の注目を引くところとなった。

それと同様に大正14年3月、外山ハツ氏も大妻函館技芸学校第一回生徒制作品（総出品点数3,000余点）のバザーを開催し、大盛会裡に終わっている。おりしも函館市におけるバザーは、この函館大妻技芸学校をもって嚆矢とするもので話題となったのである。

<校訓・校章・校歌>

大正14年9月5日の創立記念日に校訓・校章・校歌が定められ、校訓「恥を知れ」、校章「丸に糸巻」、校歌は大妻学院から譲り受け採用され、函館大妻学園において大妻精神は継承されている。

<制服>

開校当初は自由であったが、東京の大妻技芸学校の分校であることは学校創設当時の入学志望者の一つの憧れで、次第に服装が派手になり銘仙を最高として木綿の緋の元禄袖に袴を着用した服装に定められた。

その後、和服から洋服になった時、昭和4年に大妻コタカが考案した三角衿セーラー服が採用されている。写真4、写真5（学校法人函館大妻学園所蔵。撮影者高垣。令和3年）は、その後、函館大妻高等学校教員が復元した三角衿のセーラー服である。



写真4

写真5

<毎月の実行要目>



写真6

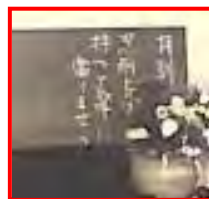


写真7

写真6（一般財団法人大妻コタカ記念会所蔵。撮影者不明。昭和7年）は、昭和7年に大妻コタカが外山ハツ氏創立の函館大妻学園を訪問した時の写真である。写真7は写真6の一部拡大で、赤枠で示した黒板に「月訓 忍耐を持って事に当たりませう」と書かれているのが分かる。

東京の大妻技芸学校では校訓、綱領に副うため毎月特に実行する要目が定められその実行要目が校内に掲示され、通信簿にも記され生徒たちに周知する工夫がされていたが、外山ハツ氏の函館大妻技芸学校においても同様に生徒指導がなされ、大妻教育が継承されていたことが分かる。

<北海道における初の女子中学校長>

昭和7年4月文部大臣の認可を得て、各種学校から甲種実業学校に昇格を果たし、校名を「函館大妻女子高等技芸学校」に改称。同年6月には文部大臣の認可をうけ、創立者外山ハツ氏は北海道における初の女子中学校長として就任をした。

昭和7年当時函館市には女子を対象とした教育機関は庁立高女をはじめ4校あったが、何れも高等普通教育を受ける施設であった。一方、各種学校として裁縫技芸学校は12校で「実業学校令」による女子職業学校は設置されていなかった。そのような中で、外山ハツ氏の函館大妻技芸学校は学校内の設備改善と充実に努力し、甲種実業学校に昇格を果たし、更に無試験検定により「小学校準教員」並びに「裁縫専科正教員」の免許状が授与される特典が付与されたのである。

創設から10年余りで学校に昇格し、無試験検定認可認定校になるなど目覚ましい発展を遂げている函館大妻の姿は、大妻コタカの大妻学院の発展の歴史になぞらえることができ写真8る。大妻コタカのアドバイスがちりばめられ学校経営がなされていたことだろう。外山ハツ氏により大妻教育は継承され具現されている。

写真8（一般財団法人大妻コタカ記念会所蔵。撮影者不明。大正15年）は、左が大妻コタカ、右が外山ハツ氏。



写真8

<不撓不屈の精神・大妻魂>

外山ハツ氏創設の函館大妻学園は、現在もなお

北海道函館市において女子教育を続け、令和5年に創立100年を迎える。

函館大妻学園の大妻精神は、外山ハツ氏が大妻コタカから学んだ精神で、大妻コタカから学んだ日々から「どんな困難や逆境に遭ってもひるまずくじけずあきらめないこと」を意味する「不撓不屈の精神」として大妻函館学園に根付かせた。

外山ハツ氏は「人は社会で生きる力を持たなければならない。技術を身につけ、自立に向けた資格を取得させ、地域社会に貢献する有為な人材の育成が本校の使命である。」とし、「資格は生きる力なり」やれば出来る、挫けず、諦めずに目標に向かって突き進む「不撓不屈の精神」を生徒に求め続けた。



「不撓不屈の精神」は大妻魂とも呼ばれ、函館大妻の伝統として継承されている。

写真9 (学校法

写真9

人函館大妻学園所蔵。撮影者高垣。令和3年)は、函館大妻学園内にある「不撓不屈」と「自立」を表す創立90周年記念モニュメントである。

この教えは、日々の授業、部活などの学校生活において小さい成功体験、失敗体験を繰り返す中で、失敗を屈することのなく次々と新しい天地を開拓し、新たなる勇気と忍耐を振り起し、粘り強く人生を闘い抜き、たくましくしかも楽しく長く生き抜こうと努力することこそ人生において最も大切なことであるとされている。

2 湯田とき氏

コタカチルドレン：湯田とき (旧姓和田)

大妻在学期間：大正8～10年

創設校：湯田裁縫教授所 (茨城県下館市)

調査日：令和3年4月19日

聞き取り対象者：小野寺梅代氏 (湯田とき氏孫)

大妻進学まで：

湯田とき氏 (旧姓和田) は、明治22年茨城県結城郡に地主で醤油屋を営む和田家の三女として誕生した。子供の頃に怪我をして片目を失明、義眼となってしまう。

湯田とき氏の親は義眼となった娘には身を立て

られる教育が必要と考え、明治32年の高等女学校令により明治33年に茨城県初の茨城県立水戸高等女学校 (現水戸第二高等学校) が女学校として開校した同校の技芸専修科に進学させる。そして、湯田とき氏は明治38年3月に同校第2回生として卒業する。

明治32年に高等女学校令が発令される以前の茨城県では、高等小学校を卒業した女子が進学する中等学校は存在しなかった。それは、茨城県が水戸藩の藩校で教授された水戸学を通じた思想により、全国に比較し女性に対して非常に厳しい規範がある土地柄であったことによるのだろう。女が学問を身につけても役に立たないとされ、大半の女性は農村地区において農業の重要な労働者として扱われ、結婚して嫁ぎ先で働き、子どもを産み育てることが女性の自立とされ、人生の選択肢は他にはないともされる土地柄であったようだ。

そのような地域性の中、湯田とき氏は女学校を卒業後、さらに東京に出て大妻コタカも学んだ私立和洋裁縫女学校で1年間学び、東京府教育界女学講習会において裁縫教授法の講習を受け、明治40年4月から茨城県下館高等小学校の代用教員となっている。

18歳から28歳までの10年間、大正8年まで小学校の先生として勤務をする。その間結婚、出産、離婚を経験するが、職を辞することなく小学校の教員を続けた。

しかし、大正8年8月31日付で教員を退職し、大正8年9月8日大妻技芸学校裁縫高等科に入学する。湯田とき氏30歳の時である。

キャリアアップ：

湯田とき氏が大妻技芸学校に入学をした大正8年は、大妻コタカの大妻技芸学校にとって重要な年であった。それは、女子の中等教育の進学率が急増する中、大妻技芸学校は各種学校であったために生徒は上級学校に進むことも、中等教員の検定試験も受けることもできなかった。それらを解消するために、生徒のキャリアを考えて新たに実科高等女学校を併設することを決め、大正8年2月設立認可申請を文部大臣に提出したのであった。

実科高等女学校認可申請のために大妻コタカは校地・校舎の移転・拡張を進めるなど努力をしたが、申請認可は大正8年4月16日と遅れた。

認可が遅れたために外部からの生徒募集が不可能となり、大妻技芸学校の生徒を第2、第3学年

に編入学させ、ようやく定員となる状態での開校であった。折しもこの年に湯田とき氏は大妻の門をくぐったのである。

聞き取り調査で湯田とき氏の孫小野寺梅代氏は、湯田とき氏はこの当時の目まぐるしい女子教育の制度改革を鑑みて自らのキャリアアップのために、私立和洋裁縫女学校の先輩である大妻コタカが開いた学校の実科高等女学校へ進学を希望したのではないかと話した。

湯田とき氏は大正8年9月大妻技芸学校裁縫高等科に入学し、その後大正9年に私立大妻実科高等女学校4年生に編入し、大正10年3月に大妻実科高等女学校を卒業している。

大妻学校校内誌『白ゆり1号』（大正10年7月・大妻学校発行）に、大正10年3月卒業受賞者として「学術優等」と「品行方正」の欄に和田ときの名が記されている。湯田とき氏は大妻学校での修業期間は非常に短い、技芸技術も勉強も極めて優秀であったことを示す記載である。



写真 10

写真 10（一般財団法人大妻コタカ記念会所蔵。撮影者不明。大正10年）は、大正10年の

大妻技芸学校・大妻実科高等女学校の卒業アルバム（一般財団法人大妻コタカ記念会収蔵）である。赤枠に湯田とき氏の姿を見つけることができた。



優秀な成績であった湯田とき氏は卒業時に大妻学校に残るように勧められたが辞退をしている。

卒業後の湯田とき氏について、大妻学校校内誌『白ゆり1号』（大正10年7月・大妻学校発行）の会員動静という欄で確認ができる。

そこには「和田とき様 丸の内のシンガーミシン学院に通ふてミシンを研究しておられます」と

ある。

シンガーミシン学院とは、明治39年に東京の有楽町に女子対象のミシン裁縫指導を文部省認可で始めたシンガー裁縫女学院のことである。専門的に新しくミシン洋裁裁縫を学び、更にキャリアアップに励む湯田とき氏の姿があった。湯田とき氏32歳の時である。

その後大正11年、湯田とき氏は大妻コタカの指導により、三菱財閥の岩崎家の奥様付きの仕事始めた。奥様付きの仕事とは、奥様の着物を専門に縫い、買い物をご一緒する仕事であった。

岩崎家からの「奥様付きの人材派遣依頼」は大妻学校・大妻コタカへあったのだろうと考える。そのファクターとして、大正3年に勃発した第一次世界大戦後の日本の大戦景気、大正バブルにより女子の就学熱も著しく高まり、大妻コタカの知名度も大妻学校の評判も世間に高く評価される存在になっていた。岩崎家からの人材派遣依頼は、この大妻教育の質の高さを見込んだものとする。

岩崎家からの依頼に対し、大妻コタカは大妻学校の信頼を裏切らないために、卒業時に「学術優等」と「品行方正」の栄に輝いた技芸技術も礼儀作法も飛び切り優秀でテクニカルスキルとヒューマンスキルを併せて持つ湯田とき氏を派遣したのであろう。大妻コタカは常日頃から大妻教育の評価は、実社会にひとり出て奮闘する卒業生によりもたらされるものであると同窓会誌に記している。

大妻学校校内誌『白ゆり2号』（大正11年・大妻発行）に実科高等女学校第一回卒業生異動の欄に、湯田とき氏の住所として東京府下田端町岩崎家内と記されており、岩崎家に住みこみで働いていたことを示している。

この『白ゆり2号』掲載の住所と『日本紳士録』（大正12年用・交詢社像版）に掲載されている岩崎家の住所を照らし合わせると、湯田とき氏が勤めた岩崎家とは岩崎正弥邸であることが分かった。さらに『第四版 人事興信録』（大正4年・人事興信所発行）の三菱財閥を築き上げた岩崎弥太郎氏の長男で先代より家名を継いだ岩崎久弥の欄には、弟正弥、弟妻こまと記載があり、夫人の名前が「こま」であることも判明した。

岩崎正弥氏は、『岩崎久弥伝』（昭和54年・岩崎家伝記刊行会発行）によると明治15年に生まれ、米国モルガン大学に学び、帰国後は末広農場を経営、東京イーシー工業株式会社取締役を務めた。また、正弥氏の妻こま氏については、明治時代の

外務官僚である能勢辰五郎氏の長女である。

湯田とき氏が勤めた岩崎家には奥様専用の帯用の箆笥や羽織用の箆笥という具合に着物の種類別に箆笥があり、すべてにおいて桁違いな生活ぶりであったようだ。



写真 11

と埼玉県田島ヶ原にさくら草を見物に行った時の写真である。写真右端の後ろ姿がこま夫人、左端が湯田とき氏である。

大妻教育の継承と具現： ＜和服裁縫教授所の開設＞

大正 12 年、湯田とき氏は岩崎家の奥様付きを辞し、故郷の茨城県に戻り下妻で裁縫所を開設する。月謝制、出欠の管理、着物の裁ち方などの理論を取り入れた教授法を採用した。これまでの人生で積み重ねたキャリアが裁縫所経営で発揮されたのである。

湯田とき氏の裁縫所については『下妻の裁縫所』（平成 10 年・下妻市ふるさと博物館発行）に詳細が記されている。ここでは『下妻の裁縫所』の記述の一部と湯田とき氏の孫小野寺梅代氏からの聞き取り調査結果を参考に記すことにする。

＜湯田裁縫教授所＞

大正 14 年、湯田とき氏にさらなる転機が訪れる。それは、福島県南会津出身で養蚕関係の指導員として赴任した 17 歳年上で妻を亡くした又八氏と再婚したことである。再婚後、借家で開設していた裁縫所の生徒が増加し、土地を求めて居宅兼裁縫所を新築した。昭和 5 年のことである。

湯田とき氏が裁縫所を開設した当時の茨城県下妻は農村地区で女性は農業労働・農家経営を支える「嫁」としての側面が大きく、戦前はお裁縫ができることが嫁入りの際に有利なテクニカルスキルであった。

写真 12（小野寺梅代氏所蔵。撮影者不明。昭和 9 年）は昭和 9 年度湯田裁縫教授所卒業記念の写

真で、赤枠の左から恩師大妻コタカ、右隣が湯田とき氏、又八氏である。

女子教育の先駆者として既に著名となっていた大妻コタカが湯田裁縫教授所の卒業式に列席したことは、下妻で裁縫所を開設した湯田とき氏に 1 段と箔を与えたに違いない。湯田裁縫教授所には大妻というブランド力があったのだ。



写真 12

湯田とき氏の指導は裁縫技術だけでなく、大妻教育でも重視していた作法にも厳しいと評判であった。生徒は下妻町内だけでなく農閑期になると荷馬車に布団や米を積んで「娘をお願いします」と親が頼みにきたそうである。

下妻町内の生徒は 1 年間通して通い、遠隔地からの生徒は農閑期だけ湯田裁縫教授所に住み込んで学んだという。また、夫の親戚の娘たちも会津から来たという。今と違い昭和初期当時はインフラが整っておらず、東北から関東に来るのは大変なことで、会津から来ると一年間帰らずに住み込んで辛抱強く技術の習得に励んだという。

通いの生徒は技術が上達すると呉服屋や既製品屋から材料である布地を貸してもらい縫わせてもらうことができた。留袖が縫えるくらいに上手になると縫い賃がもらえるようになったという。

農閑期だけの生徒は、農村における衣生活の改善進歩を目指し、農家で必要な半纏・丹前・かい巻・緋のもんぺなど学校教育では教えない衣類の実習をしたという。

「下妻の湯田裁縫所でお裁縫を習いました」と言えば縁談が容易にまとまったと言われるようになり、卒業生だと嘘をつく人も現れ、卒業生かどうか調べに来ることもあったそうである。

＜湯田とき氏による大妻教育の継承と具現＞

湯田裁縫教授所は昭和 23 年 4 月に各種学校の認可を得て、湯田和洋裁学院と改称し、これまでの

和裁科の他に洋裁科・編物科・料理科を開設する。

和裁科は湯田とき氏が担当、洋裁科と編物科は養女の明子氏が担当した。明子氏は、指導者として湯田とき氏の跡を継ぐために昭和22年の1年間大妻技芸学校裁縫研究科で学び、文化服装学院などで研鑽を積んだ。戦争未亡人となった明子氏は湯田とき氏の指導の下、戦後の激動、衣生活等々の変化の中で女子教育に尽くした。

会津から来た親戚湯田安子氏は、下妻町立実科女学校（現茨城県立下妻第二高等学校）で学び、卒業後湯田裁縫教授所で学んだ後、故郷会津で和洋裁専修学校を創設した。湯田とき氏から学んだ大妻教育は会津の子女にも受け継がれた。

湯田裁縫所に3年間住み込んで学んだ染野光子氏（旧姓石塚）は、下妻実科女学校（現茨城県立下妻第二高等学校）から昭和13年4月大妻技芸学校に進学している。田舎に帰ったら裁縫を教えるつもりであったが、女学校も大妻技芸もメートル法で鯨尺を修得していなかった。田舎は鯨尺であった。そこで、鯨尺で指導している湯田裁縫所に3年間住み込んで学んでいる。

結婚後、嫁ぎ先の義母が経営する裁縫所を引き継ぎ、裁縫を教えるだけでなく大妻女子大学で学んだ作法や華道も教え、花嫁学校としてその時代の地域に根差した教育を実践した。

また、特別支援学級の生徒たちの指導も辛抱強く実施し、生徒はその後独立して留袖や訪問着を縫えるようにまで教育をしたという。学びたい人には学ばせる、個人指導により己にも気づかない能力を引き伸ばす大妻コタカの教育が継承されている。

湯田とき氏の孫であり明子氏の娘である小野寺梅代氏もまた大妻女子大学で学び、昭和36年に卒業すると茨城県立高等学校の教員になった。そして結婚後も出産、子育てをしながら定年まで教員を勤めている。「働き続けること」は、湯田とき氏の教えであったという。

このように湯田とき氏により、大妻教育はその時代に即し下妻に根差した女子教育が実践され、被服指導者をも育成し大妻教育は継承され具現化されたのである。

湯田裁縫所は、戦後の激動、衣生活の変化の中で、湯田とき氏の指導の下、養女の湯田明子氏が指導に当たった。創設以来40有余年の間に10,000名の卒業生を押し、卒業生一人ひとりの実力が湯田裁縫所の真価として証明された。被服教育に専

念し、特に農村における衣生活の改善進歩に特段の効果を上げた。経済的に、独立のために、服装指導者として世に立つための指導が続けられた。

しかし、経済成長にともない産業転換が進み、農業ではなく第二次、第三次産業への女子就業者が年ごとに増加し、被服技術を学ぶことが重要ではなくなり、昭和50年に湯田裁縫所はその役目を終えることとなった。

3 杉山すか氏

コタカチルドレン：杉山すか

大妻在学期間：～大正7年

創設校：杉山裁縫教授所（栃木県真岡市）

調査日：令和3年6月24日

聞き取り対象者：谷田部八重子氏・谷田部進氏・小島芳子氏・高橋秀典氏・苅部良江氏

杉山裁縫教授所の搜索：



写真13

写真13（一般財団法人大妻コタカ記念会収蔵。撮影者不明。昭和8年）は、一般財団法人大妻コタカ記念会収蔵の一枚で、写真の詳細には「昭和8年4月9日杉山裁縫教授所卒業式当日」とだけ記されている。前列右から2人目に大妻コタカの姿がある。

一般財団法人大妻コタカ記念会収蔵写真の中には、このように卒業生が創設したであろう裁縫所を訪問する大妻コタカの写りが複数残されている。しかし、それらの写真の多くが卒業生の創設校なのか、場所はどこなのかの糸口となる記載がない。

戦前・戦後の日本は繊維産業と共に裁縫教育があり、地方における裁縫所の役割は女性の自立を支える技術の教場であった。裁縫教授所を運営したコタカチルドレンは、社会に求められ、社会貢献し大妻コタカ教育を継承し具現化していたのである。

この杉山裁縫教授所については他の裁縫所に比

べて多年にわたる数多くの写真が一般財団法人大妻コタカ記念会に残されている。また、杉山すか氏の名前は『大妻コタカ先生追悼録』（昭和45年・大妻学院発行）でも目にすることができ、杉山すか氏と大妻コタカの親交の深さを垣間見ることができる。

大妻学校校内誌『白ゆり3号』（大正13年・大妻発行）の卒業生一覧に、大正7年度裁縫部高等科卒業生3名の中に杉山すか氏の名前が掲載されている。大妻コタカの私塾は大正5年9月に各種学校認可を受けたばかりであったので大正7年度の卒業生は、真に大妻学院草創期に大妻の門を潜った人たちである。

『白ゆり3号』の卒業生一覧には住所の掲載もあり、杉山すか氏の住所が茨城県真壁郡であることがわかった。この住所を拠りどころとして、杉山裁縫教授所の調査を開始した。しかし、茨城県真壁郡は行政区画変更により現存せず調査は難航した。

そこで同じ茨城県の調査で下妻市の湯田裁縫所調査を実施した際、茨城県の教員をされた卒業生に調査方法についてアドバイスをいただき、教育委員会に問い合わせを行うことにした。

まず茨城県桜川市教育委員会、茨城県筑西市教育委員会の順に問い合わせをした。この地域には初期の女子教育、裁縫所に関する資料は欠如しているとのことで、両教育委員会は杉山裁縫教授所調査に関心を寄せ、快く協力をしてくれた。そして、杉山裁縫教授所が現在の栃木県真岡市に存在したことを突き止めるに至った。

栃木県真岡市教育委員会での調査でも、茨城県の教育委員会同様に杉山裁縫教授所へ関心を寄せ精力的に地域の方々への聞き込み調査を実施してくれた。そして遂に杉山すか氏の縁戚者、杉山すか氏の教え子、仕立物を依頼し懇意にしていた呉服商から聞き取り調査を実施することが出来た。

杉山すか氏：

聞き取り調査では、杉山すか氏が大妻技芸学校の卒業生であること以外は不明であった。大妻技芸学校への進学動機や大妻技芸学校進学前は何処でどのように勉強したかについて知る人はなかった。

ただ一点、「地元で裁縫教授所を開くことを志していた」ということを杉山すか氏から直接聞いたという。

大妻技芸学校を卒業した杉山すか氏は、現在の茨城県筑西市に位置する実家で和裁の教授所を開設。その後、現在の栃木県真岡市に移転したという。聞き取り調査から新しい裁縫所は町中の街道沿いにあり、より多くの生徒が通えるように移転したのであろうとのことであった。



写真 14

移転後の裁縫所は、道場のような大きな建物で広間には畳が敷き詰められそこが教室であったという。畳の部屋は広く、子どもの頃走り回って遊んだと話す人もあり、この界限では大きな裁縫教授所であったようだ。

その後杉山すか氏は銀行員の雀見源四郎氏と結婚。源四郎氏は杉山家の養子となったのだという。

写真14（谷田部進氏所蔵。撮影者不明。撮影日不明）は、杉山すか氏と源四郎氏である。夫が銀行員であったことで、杉山すか氏は経済的に安定した中で裁縫所経営に当たることができたのではないかと、杉山すか氏の縁戚者は語った。

大妻同窓会誌『ふるさと』（昭和9年9月号・大妻同窓会発行）の同窓会という欄に、夏期講習のために母校に来ていた卒業生と大妻コタカの懇談の様子が記されている。参加者の内訳は24名で参加者のうち半数の12名が高等女学校または小学校の先生、7名が大妻技芸学校勤務、2名が家事手伝い、2名が学生、1名が裁縫所経営者であった。

裁縫所経営者として参加した1名は杉山すか氏のこと、『ふるさと』には次のように記されている。「杉山すかさんは、茨城の真壁に裁縫塾を御経営、お母様（大妻コタカ）が毎年卒業式にお訪ねとのこと」とあり、大妻コタカが杉山裁縫教授所



写真 15

に毎年訪問していたことが記されていた。

杉山すか氏もまた毎年大妻の講習会で新しい技術を学んでいたことだろう。

写真 15 (一般財団法人大妻コタカ記念会所蔵. 撮影日不明. 昭和 24 年) は, 昭和 24 年 4 月杉山裁縫教授所 14 回 15 回卒業記念の写真で, 前列左から 3 人目が杉山すか氏, 大妻コタカ, 杉山すか氏の夫源四郎氏である. 後列着物姿の卒業生たちは丸めた卒業証書を手をしている。

杉山裁縫教授所の卒業生からの聞き取り調査では, 大妻コタカは卒業式のほかに「針供養」の時も杉山裁縫教授所を訪問していたという. その際, 大妻コタカは色々な用事を差し置いても杉山裁縫教授所の行事に来ているのだと話し, 「コタカさんと杉山先生は本当に仲が良かった」と淡々と話していた。

大妻コタカは既にその頃女子教育界の先駆者として有名で, 娘を杉山裁縫教授所へ通わせていた親たちは大妻コタカと親交のある杉山すか氏を,



写真 16 教授所の卒業式で祝辞を述べる大妻コタカである。

杉山裁縫教授所について信頼のおける裁縫所として位置付けられていた筈である。

写真 16 (一般財団法人大妻コタカ記念会所蔵. 撮影者不明. 昭和 29 年) は昭和 29 年 4 月, 杉山裁縫

<農村地区での女子教育>

『栃木県教育史第 2 巻』(昭和 32 年・栃木県連合教育会発行)によるとこの地方の女子の教育は, 封建的女性観が根強く高い文化的教養は女子を不幸にするとされ, 女子には実際生活に必要な裁縫を修得することが教育であったとある。

裁縫を修得することができたといっても, お針の教室に行けたのは裕福な家庭の子どもで, 農村部では裕福な家庭でも母親から裁縫を習い, お針を習いに行っても一般的に雑巾や野良着・簡単な普段着を縫う程度であったようだ. 羽織や袴を着用する生活をしていない農村地区では, 新しく反物を裁ち, 着物・袴を縫える人はとても少なかったそうである。

そのような環境である栃木県真岡市で開設され

た杉山裁縫教授所は, 町中の街道沿いの通いやすい場所に設けられたことで多くの女子が学ぶことが出来たにちがいない. 生徒数は多い時には 30 人程おり, 農閑期には農家の子女が花嫁修業として来ていたという。



写真 17 行い広い敷地であったことがわかった。

ここには裁縫所の他に茶室も在り, 杉山すか氏は茶道も教授し, 作法も, また編物も教えていたという. この土地の時代に合わせた女子の教育が行われていたのである。

写真 17 (撮影者高垣. 令和 3 年) は杉山裁縫教授所跡地で, 現在は空き地となっている. 実際に現地調査を

<裁縫所と呉服店>

杉山すか氏の指導はとても厳しく, どの時代も泣きながら修業し, 実力を手にしたそうである。

高等学校を卒業後, 杉山裁縫教授所で学んだ方は, 結婚後も, 高齢となった今でも呉服商からの依頼があれば仕立物により収入を得ているという。

この地方において, 裁縫教授所と呉服商の結びつきは日本の繊維産業の構造に深く関与している. 昭和初期に東京の呉服商がデパートに発展したことに伴い, 東京近郊のこの地域の裁縫所には東京のデパートからの縫製依頼があり, 縫製産業は隆盛したのである。

杉山裁縫教授所と関りのあった呉服商によると, 仕立物の内容により依頼先を決め, 急ぎの絹仕立ての着物は技術の高い杉山すか氏に依頼していたという。

<千代ヶ岡高等技芸学校>

杉山裁縫教授所は昭和 29 年に各種学校の認可を得て, 千代ヶ岡高等技芸学校と改称した。



写真 18

写真 18 (谷田部進氏所蔵. 撮影者不明. 昭和 29 年) は, 昭和 29 年 6 月 6 日千代ヶ岡高等技芸学校の写真で, 赤枠は写真 18 の一部拡大で右から杉山すか氏, 大妻コタカ, 杉山源四郎氏である. この各種学校認可申請は, 大妻コタカの勧めによるものだったそうである.

地元の歴史研究雑誌『二宮町史研究 3 号』(平成 17 年・二宮町発行) に, 千代ヶ岡高等技芸学校の名前を見つけることが出来る.

千代ヶ岡高等技芸学校は各種学校認可から 10 年後の昭和 39 年, 時代の趨勢により学校の役目を終え, 杉山すか氏は呉服店からの依頼で仕立物の仕事だけをするようになったそうである.

杉山すか氏の縁戚者によると子どもが誕生すると産着など様々に作ってくれたという. 産着は後々長襦袢に着まわせるように仕立てられ, 創意工夫されていて驚いたという. 創意工夫こそ大妻コタカの代名詞で, 大妻教育の真骨頂である.

写真 19 (谷田部進氏所蔵. 撮影者不明. 撮影日不明) は, 晩年の杉山すか氏である.



写真 19

杉山すか氏は女子教育として裁縫が必要とされた時代にひとり裁縫所を開設し, 地域のために大妻教育を継承し実践した人であった.

4 長澤八重子氏

コタカチルドレン: 長澤八重子

大妻在学期間: 大正 13 年～昭和 7 年

経営校: 桐丘学園 (群馬県みどり市)

調査日: 令和 3 年 7 月 21 日

聞き取り対象者: 手島仁氏・中村操氏・鈴木恭子氏

桐生裁縫女学校・長澤幹子氏と大妻コタカ:

桐生裁縫女学校 (現学校法人桐丘学園・桐生大学) は, 大妻コタカの義姉熊田みゆき氏の親戚である長澤幹子氏 (旧姓番) が, 明治 34 年に群馬県桐生市に創設した女学校である.

創立者である長澤幹子氏は生前に一度だけ東京の大妻コタカを訪問し, 学校の将来や令息に大妻技芸学校卒業生をお嫁さんになどの相談をしたこ

とがあったという. その訪問から程なく長澤幹子氏は「学校経営のことは東京の大妻様に一任すべし」という遺言を残し, 昭和 6 年 12 月 6 日急逝する.

大妻コタカは長澤幹子氏からの遺言を受けて, 長澤幹子氏の子息の長澤義雄氏の結婚の世話をする. 『大妻コタカ先生追悼録』(昭和 45 年・大妻学院発行) に「スピード結婚」と題する長澤義雄氏による記載があり, それには次のようにある.

「昭和 6 年 12 月 6 日に私は母を失って, 同月 9 日に葬儀をすませるとすぐ先生をお訪ねして母が遺してくれた学校の運営についてご相談をした. その時先生は「先ず妻をめとることです。」と言われて, 次にお伺いした 12 月の 28 日には, 羽織・袴も全部先生が新調くださって, さっさと式を挙げさせられてしまった。」

結婚相手は大妻高等女学校で歴史・地理を担当する教員成瀬利一氏の娘八重子氏であった. 八重子氏は昭和 2 年大妻高等女学校を卒業, 昭和 7 年大妻技芸学校高等技芸科を卒業し, 中等学校教員資格を有していた.



写真 20

写真 20 (大妻同窓会誌『ふる里』昭和 7 年 3 月 6 日掲載. 撮影者不明. 撮影日不明) は, 大妻同窓会誌『ふる里』昭和 7 年 3 月 6 日に掲載された成瀬八重子氏の結婚の様子を知らせる写真である.

写真のコメントとして「昭和 6 年 12 月 28 日, 成瀬八重子様には桐生裁縫女学校校長長澤氏と芽出度く御結婚なさいました. 未来の同校校長さんです. 長澤さんは大妻校長先生の義姉熊田みゆき様の御親戚に当たります. このお写真には皆様のおなじみ揃いです. 前列左から大妻校長先生, 熊田みゆきさん, 新婦八重子さん, 新郎長澤氏, 熊田小兵衛氏 (校長のお兄様), 後列中央が成瀬先生と奥様。」とある.

昭和 7 年 1 月 11 日長澤義雄氏は正式に校長に就任. 八重子氏も裁縫科と国語科の教員として桐生

裁縫女学校に就職し、夫婦協力して経営に当たることになったのである。

大妻教育の継承と具現：

<大妻技芸学校教員と卒業生の奉職>

創設者長澤幹子氏の遺言を受けて桐生裁縫女学校の経営の手助けを始めた大妻コタカは、大妻技芸学校から先生と卒業生を桐生裁縫女学校へ派遣している。

大妻同窓会誌『ふる里』（昭和7年3月6日・大妻同窓会発行）「ふる里だより3」母校教員異動の欄に、「富田きよ先生は小澤花枝（裁研及洋服科卒）さんと一緒に今度成瀬八重子様のご結婚になりました」と記されている。



桐生裁縫女学校へ御赴任になりました」と記されている。

写真21

写真21（大妻学院所蔵。撮影者不明。昭和6年）は、昭和6年度女性教員集合写真である。最後列左から3人目に桐生裁縫女学校へ赴任した富田きよ氏の姿があり、富田きよ氏が大妻技芸学校の教員であったことを確認できる。

昭和7～9年発行の大妻同窓会誌『ふる里』に掲載された卒業生就職者情報を調査したところ、桐生裁縫女学校へ赴任した卒業生は以下のとおりである。他校で研鑽した卒業生も含まれより優れた卒業生を派遣し、大妻教育が桐生の地で継承されたことが分かった。

表6. 大妻技芸学校卒業後桐生裁縫女学校に奉職した者

	氏名	卒業年月	卒業学科 他
教員	富田 きよ		大妻技芸学校の先生
卒業生	小澤 花枝	昭和5年7月	洋裁部高等科
		昭和6年3月	裁縫部研究科
卒業生	橋爪 ミチ	昭和4年3月	裁縫部研究科
		昭和7年3月	高等技芸科
卒業生	山本 孝子	昭和8年3月	高等技芸科
卒業生	菅原 一江	昭和7年3月	本科
		昭和8年3月	裁縫部高等科（裁縫部は和裁中心）
卒業生	大嶺 節子	昭和8年3月	裁縫部高等科（裁縫部は和裁中心）
卒業生	石岡 幹子	昭和7年3月	本科
		昭和8年3月	裁縫部高等科
卒業生	横山 キマ	昭和6年3月	裁縫部高等科（裁縫部は和裁中心）

<夜学科の開設>

『桐生市教育史 下巻』（平成5年・桐生市教育委員会発行）第4節中等教育第1章昭和初期の教育の章に、昭和7年1月28日に桐生裁縫女学校が群馬県知事の認可を受けて、桐生裁縫女学校内に「夜学科」を設置したことが記されていた。

そこには「夜学科」は午後5時から午後9時までで、勤労女子や農村女子の就学要求に応えるために設置されたのであろうと記されている。

学則では「夜学科ハ14才以上ノ者ニ入学ヲ許シ修了年限ヲ一ケ年トス」と定められた。しかし、農村女子の就学状況を調べたところ一年通じて登校するのは難しく、農閑期となる期間であれば在学が可能であるため、昭和7年9月に学則を変更し、夜学科の修業年限を二期に分けることとした。第一期修業者を二期に編入するものとし、卒業を認めるように定めたのである。

学びたい人には学ぶチャンスを与える、更に夜学科の卒業生にも女学校を卒業したキャリアが得られるようにという大妻コタカの教えが継承されている。

<姉妹校>

昭和7年2月桐生裁縫女学校は大妻コタカを理事に迎え、桐生裁縫女学校と大妻高等女学校は姉妹校となっている。大妻学院の歴史には登場しない史実である。

桐生市『市制15年』（昭和11年発行）の桐生高等家政学校の項に大妻コタカについての記載があり、姉妹校という表記も見られる。そこには「…昭和7年2月16日本邦女子教育界の人傑大妻高等女学校、同技芸学校校長大妻コタカ女史が同校の理事に就任。大妻姉妹校として経営に当たり、昭和9年2月8日財団法人並びに実業学校、同職業学校規程により昇格の件認可…」とある。

昭和9年2月桐生裁縫女学校は財団法人に組織を変更し文部大臣認可の高等家政女学校に昇格。校名を桐生高等家政女学校と改称する。

桐生高等家政女学校卒業記念帖掲載の財団役員名簿には理事として大妻コタカの名前を確認することが出来る。

また、桐生高等家政女学校卒業記念帖の1頁には、創立者と並んでいる大妻コタカの写りが掲載され、前校長長澤幹子先生と顧問大妻コタカ先生と記されている。

卒業アルバムに創立者と並んでいる大妻コタカ

の姿からは、大妻コタカがいかにか桐生高等家政女学校、経営者の長澤夫妻に大きな力を貸したことを示している。

『桐生市教育史 下巻』（平成5年・桐生市教育委員会発行）に、昭和9年桐生高等家政女学校は、これまでの校地では狭隘であり、将来の発展を想像し新しい校地を求めて新校舎建築を始めたこと、しかし費用が初期計画の2倍になり、大妻コタカも寄付をしたことが記されている。

大妻学院は同時期には鉄筋校舎建設のため資金を必要としていたが、大妻コタカは桐生高等家政女学校のために寄付をしているのである。

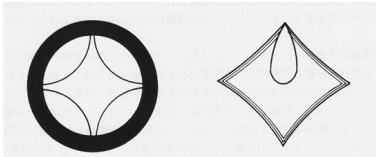
<制服>



写真 22

写真 22（学校法人桐丘学園所蔵。撮影者不明。昭和15年）は、昭和15年11月桐生高等家政女学校創立40周年と増築落成式典で祝辞を述べる大妻コタカの姿である。話を聞いている生徒の制服が、三角衿セーラーであることに気づく。

三角衿セーラー服は、大妻技芸学校の生徒が昭和4年から着用し、大妻コタカの考案したデザインが特徴的な制服である。特に大妻の校章である糸巻の形を象徴し、大妻技芸学校にしかない唯一無二の制服と考えていた。



左は大妻の校章、右はセーラーカラーを上から見た図である。その三角衿セーラー制服を

桐生高等家政女学校で採用されていたのは驚きである。桐生高等家政女学校が大妻コタカの教えを隅々まで吸収しようとする姿が見て取れる。

<大妻教育の継承と発展>



写真 23



写真 24

写真 23, 24（長野県諏訪市博物館所蔵。撮影者高垣。平成29年）は、大妻技芸学校卒業生で桐生裁縫家政女学校に派遣された諏方きま氏（旧姓横山）授業用ノートである。この他にも桐生家政授業ノートは複数あり、すべて長野県諏訪市博物館に収蔵されている。諏方きま氏のノートは細かく丁寧に記され、昭和ヒトケタの大妻技芸学校の教育水準の高さを裏付けている。このノートは、大妻教育が桐生高等家政女学校でも継承されていたことを物語っている。

桐生高等家政女学校では、昭和17年に長澤八重子氏が筆頭に和裁縫教科書『和裁』が編纂されている。教師の出身校により和裁の教授法が異なるため桐生裁縫として統一した教科書を作り上げたのである。この教科書は桐生高等家政女学校において大妻教育が他の教育と融合し、発展した証



写真 25

ではないだろうか。

写真 25（一般財団法人大妻コタカ記念会所蔵。撮影者不明。撮影日不明）は戦後、大妻女子大学前で撮影された一枚である。前列左から長澤八重子氏、大妻コタカ、外山ハツ氏と並んでいる。外山ハツ氏は大妻技芸学校の分校として北海道に函館大妻学園を創設した大妻の卒業生である。

偶然にも大妻学院の姉妹校、分校として大妻教育を継承し、発展させた卒業生ふたりが大妻コタカを挟んで撮影された一枚である。

4. 考察

建学の精神は「学校の特性」であり、創立者が学校設立目的として挙げた精神性である。学校が人材育成を含めどのように社会的使命を果たしたかが建学の精神として存在すると考える。

大妻学院の建学の精神は大妻コタカ精神を示す。前章の3 調査結果で大妻コタカから教育をうけた（人材教育をされた）外山ハツ氏・湯田とき氏・杉山すか氏・長澤八重子氏の4名のコタカチルドレンは、大正時代から昭和初期に大妻技芸学校で学んだ卒業生で、大正デモクラシーの時代であった。

大妻コタカが何を教えたかについては3-1 章で示したように、大妻コタカは世の中で活躍できる子女の育成とし、技芸というテクニカルスキルにとどまらず、人間育成につながる修身・道徳・礼儀作法というヒューマンスキルを教授している。

また、婦人雑誌やNHK ラジオ放送において、広く一般に向け「生活をゆたかにする楽しい工夫」、「生活の切りつめ方・余裕を生み出し貯金を作る」などと題した家事経済についても分かりやすく解説し、生活の知恵を授ける家事評論家と世間から評されていた。

日本の家族制度は、儒教的「孝」「恩」の思想が根深く、その思想が国民の思想だった時代から女性の役割は結婚し、家庭を持ち子どもを育てるものとされていた。江戸時代から明治期の儒学者である貝原益軒が記し幅広く支持された『女大学』には、女として夫と家を支え、慎みを忘れずに女の道を究めよという倫理観のもと、封建的な道徳観が貫かれていたのである。

大妻コタカより約50年前に生まれた福沢諭吉は、明治に入り日本が文明化をしていくために女性の解放が第一と考え『女大学』を批判する書『女大学評論、新女大学』を出版している。そこでは、女性は男性と伍して生きていくためには、手に職をつけて経済的に自立することであると記している。文明社会の女子の必須アイテムとして「経済学と法律」の概要を学ぶことが必要であるとしている。

大妻コタカは婦人雑誌『婦人倶楽部』（大正11年・講談社発行）において「女であるからと云う一言の下に」と題し、女性に対してかたくなな社会風潮に対し以下のように論じている。

学問技芸を修業するにも「女であるから」といってひかえ目にさせられ、また既に修得した知識

を実地に行おうとしても「女なるが故に」と抑制されて何一つも自由にならない有様であるのは、文化生活に進もうとするわが国人の現状に照らして実に一大障害を与えるものではなからうか。

婦女子の支配権を握っている父親あるいは夫である人びとが、もっともっと時勢をというものを理解して根本的に男女という障壁を撤廃し、階級を取り去って、女子にも男子同様の教育を施して、十分にその天分を発揮させ、互いに隔てなく信じ相助け、世界の文化に遅れをとらないように努力したならばどれほど愉快にまた幸福にくらすことができるであろうか。そしてこのような機運をつくるには婦人自らも、もっと真面目に、もっと勤勉に、もっともっと努力的にならなければならない。

世界に目を向けた時、19世紀前半のイギリスもまた日本同様に上流階級の女性でさえ女性の役割は結婚し、家庭を持ち子どもを育てるもので、男性に仕えることが美德とされていた。その時代のイギリスで、大妻コタカより約80年前に生まれた作家ハリエット・マーティノーが、女性たちを解放するためには経済学を学ぶことが重要であると主張し、経済状態が様々な社会環境下で人々の生活にどのような影響を与えたかを示す25の短編小説『経済学例解』を毎月一冊のペースで刊行し、ベストセラーとなり、女性たちを啓蒙している。

大妻コタカも福沢諭吉やイギリスのハリエット・マーティノー同様に、勤勉に努力し経済的に自立できる知識を持つことの重要性を女性たちに啓蒙していたのである。

福沢諭吉の教えやハリエット・マーティノーがイギリスの女性たちを啓蒙したように、大妻コタカの教えは、コタカチルドレンにより継承し具現化され、そして発展をしたのである。

インフラが完備されていなかった時代にコタカチルドレンが地方に創設した学校あるいは裁縫教授所は、女子庶民教育に重要な位置を占めていた。コタカチルドレンが経営した学校では、農閑期だけが学ぶチャンスであった農村女性に対し、夜間部を設け、更に2期制を導入するなど、就学後女学校を卒業したキャリアが得られるようにしたことは、「学びたい人に何としても学ばせたい」とする大妻コタカの精神が現れていると考える。

外山ハツ氏と湯田とき氏は社会で働き、学びの必要性を感じ大妻の門を叩き、大妻コタカの教えを受けている。学び続けることの重要さを大妻コ

タカから学び継承し発展させている。

大妻教育の特徴である個人教授により、生徒の自身も気付かなかった個性や才能を開花させ、手に職を付けて経済的に自立する道を築き上げている。また、コタカチルドレンから教えを受けた生徒たちは、更に地方で裁縫教授所を創設し、大妻コタカの教えを伝授され、さらに社会貢献していることも検証された。

大正時代から昭和初期の日本は、繊維を中心とする産業が隆盛した時代であった。産業と教育は密接に関与し、繊維産業中心の時代にあって裁縫手芸教育は経済成長に貢献していた時代であった。

また、この時代の三越、高島屋、松坂屋などの大手呉服店は、伝統的な座売りの販売方法から陳列販売のデパートに転換したことで小売りが急増し、各デパートでは製造品の仕事を担う専属の裁縫所（和裁所）を創設している。大妻技芸学校で裁縫手芸教育を学んだ卒業生も高島屋や三越、松坂屋といったデパートの呉服部門（和裁所）に就職をし、指導者として貢献し、裁縫研究に従事した記録が残る。

東京近郊の農村部地域の裁縫教授所においては、デパートからの依頼を地域の呉服店を経由し請け負うルートも確立し、生徒たちは手に職をつけ経済的に自立することができたのである。

以下はこれ以外の令和3年度共同研究プロジェクトとして実施した内容である。

<高度経済成長期のコタカチルドレン>

高度経済成長期である昭和30年代後半から昭和40年代前半に、東京都千代田区の大妻コタカ邸内で大妻コタカと生活を共にしたコタカチルドレンへのアンケート調査を実施した。

コタカチルドレンのほとんどが大妻コタカの故郷広島県世羅郡周辺の出身者で、大妻コタカの出身校となる世羅高等学校の卒業生、大妻コタカが校長を務めた町立の大妻女子専門学校の卒業生、大妻コタカの親戚関係者、大妻コタカの関係者であった。その他として地方の裁縫教授所を営んだコタカチルドレンからの推薦者もあった。

大妻コタカは生涯学習を推奨し、実践した人であった。『ふるさと20号』（昭和41年・大妻同窓会発行）に「とかく女性は学校卒業と同時に進歩が止まると言われるが、学校はこれからの生活の土台作りで、本当の向上発展への努力と研鑽は、これからの勉強いかに関わっている。どうか仕

事に追われることなく追ってゆく前向きの姿勢をもって、日常を過ごしてゆくよう心掛けてもらいたいと思う」と、大妻コタカが生涯学習を提唱しているコメントが残されている。

卒業後のコタカチルドレンは、教員となった者、更に和裁の勉強を続けライセンスを取り和裁塾を開いた者、結婚後夫婦で会社を営んだ事業を拡大させた者、結婚後家庭に入り子育て中に簿記を修得し、その後会社経営をした者もあった。ボランティア活動を続けた者なるなど大妻コタカが提唱した生涯学習は実践されていたことが分かった。

<大妻コタカに関する講演会の開催>

平成30年度から当該研究グループでは大妻女子大学・一般財団法人大妻コタカ記念会と広島県世羅郡世羅町・世羅町教育委員会・大妻コタカ先生顕彰会と連携を図り、女子教育に尽力した大妻コタカの偉業を大妻コタカ生誕地である広島県世羅郡世羅町で継承させるべく事業を続けてきた。

世羅町では教育プランの一つに郷土への誇りを持つ人材教育を掲げており、大妻精神の継承と具現、発展を大妻コタカ生誕の地に根付かせていくことを目指すためには、日々生徒たちと緊密に接している教員の協力なしにその効果は発揮できないと考え、オンラインによる大妻コタカに関する講演会を令和3年8月23日（月）に実施した。

地元出身の大妻コタカに関する講演は、世羅町に住む子どもの育成につながり、児童にとっては身近で学ぶ意欲にもつながると好評であった。キャリア教育、ふるさと教育を推進したいと聴講者から声も上がり、継承活動としての成果があった。

5. 今後の取り組み

大妻コタカ没後50有余年を過ぎた。かつては名士として世間に知られ、社会に貢献した大妻コタカであったが、知る人ぞ知る存在ではなくなってしまった。

また、没後50年以上が過ぎたということは、大妻コタカに直接教えをもけたコタカチルドレンも超高齢であり、大妻コタカ精神を語ることでできる人も少なくなったことを示している。大妻精神を継承していくうえで、コタカチルドレンの活躍を地道にたゆまず調査続けていく必要があると考える。

また同時に、大妻コタカが活躍した時代は戦前戦後の時代で、戦時中の大妻コタカの活動を整理

する必要もあり、取り組みを進めていきたいと考えている。

参考文献

大妻学校同窓会（1926）『創立十周年記念 大妻学校の過去と現在』

大妻学院（1989）『大妻学院八十年史』

函館大妻学園（2014）『創立 90 周年記念誌』

北海道私学協会（1988）『北海道私学教育史』

大妻学院（1970）『大妻コタカ先生追悼録』

主婦の友社（1933）『主婦の友』

大妻コタカ記念会（1983）『ふるさと 36 号』

大妻学校同窓会（1921）『白ゆり 1 号』

下妻市ふるさと博物館（1988）『下妻の裁縫所』

桐生市（1936）『市制 15 年』

桐生市教育委員会（1993）『桐生市教育史 下巻』

清水敦・桜井毅（2012）『ヴィクトリア時代におけるフェミニズムの勃興と経済学』

福沢諭吉（1918）『女大学評論, 新女大学』

講談社（1922）『婦人倶楽部』

他

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（K2112）を受けたものです。